2002年 第2回 学生のための プロデザイン講座レポート

教育研究部会　（関東）

■日　時：6月21日（金）
■場　所：宝仙学園短期大学

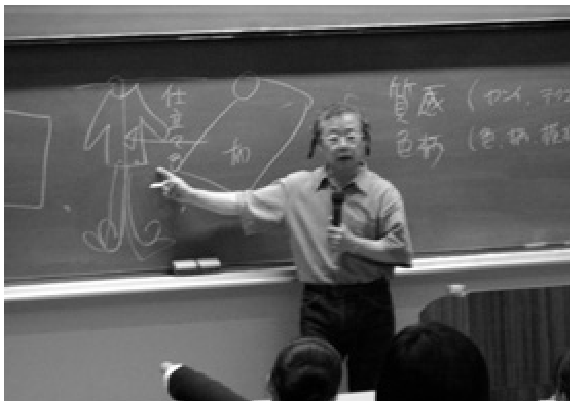
ＴＤＡ教育研究部会が主催している「学生のためのプロデザイン講座」の第2回講座が、6月 21日（金曜日）、宝仙学園短期大学、階段教室で行われました。今回は服地を専門にした企画コンサルタント会社“企画屋えぬ”を経営され、また大学や専門学校でも授業を受け持たれている野末和志さんを講師に迎え、＜服に変身する服地＞、サブタイトルとして＜動態としてのボディー感＞というテーマで講演をしていただきました。その講演の内容をレポートします。

まず、今年のプロデザイン講座は「デザインの表層とマテリアル（素材）」という共通のテーマがあるのですが、あろうことか野末さんは講壇に登場するなり、「服地はマテリアルではない」と切り出されました。一体、どういうことかと言うと、服と言うものを語る時に野末さんは2種類ある、と言います。一つはユニクロに代表されるＳＰＡ（製造小売り）の店舗で広く大量に販売される服、そしてもう一つは三宅一生や山本耀司、そして第1回目の講座を受け持っていただいた菱沼良樹さんなどに代表される、デザイナーが糸から愛着を持って作り上げていく服、に分けられる、というのです。つまり、前者で使われる服地はあくまでも商材として扱われている為、単なる「マテリアル」であり、それ以上の物ではないが、後者で使われる服地は、それだけで主体になれるものだから、決して単なる「マテリアル」ではない、ということです。箪笥を開けるとおびただしい数のユニクロの服が溢れ出、常に無頓着にユニクロの服に包まれている私にとってこの話は、今までの私の服装観を根底から覆すものでした。

また、服地の本質と言うものは、「質感を着る（繊維・テクスチャーなど）」、そして、「色柄を着る（色・柄・模様など）」、ということだけではない、仕立てられ、着られる服になって、動いて、そして様々なシルエットを演出することによって初めて服地の本質を表現するものだ、と言う話も印象に残りました。つまり、服地の本質の第一目的はボディ感であり、またデザイナーもボディ感をいかに設計するかということが一番大切だ、と言うことです。

それから色柄というビジュアル的な面だけで、服地の表層をとらえてはいけない、とも話されていました。何故なら、服地というものはその地合（ポリエステル・綿・ウール・シルクなどの組成、撚り・太さ・方向などの糸、そして組織など）によって表情を変化させるもので、触感を始め、臭覚、音感、そして、味覚などの五感を刺激する様々な表層を見せるからです。そして、人は服装によってその振る舞いが変わるものであり、そのことから服地は表層をして中身でもあり、常にその二つが混在しているものである、と論じられていました。

途中、話は変わりますが、野末さんは、日本の女性は小さい時からバービー人形や漫画のセーラームーンなどを与えられ、その結果変身願望が強くなり、洋服や化粧品にお金を注ぎ込んでしまう傾向がある、ということを話されていました。つまり、そのことはファッション企業（業界）の戦略に操られ洗脳されている、ということに他ならない、と言うことです。思いがけない話の展開でなかなか興味深い話でした。

最後に学生からの質疑応答がありましたが、その中から特に印象に残った話を紹介します。それは野末さんから会場に来ていたファッションデザインを勉強している学生たちに送られた熱いメッセージです。「ファッションデザインというものは頭で分かろうとしてはダメ。自分が深く服地の中に埋没しなければ本当の意味で理解することは出来ない」。この「埋没」という言葉が私にはとても新鮮に思えました。

今回の講座には美術系の大学や専門学校から40名近くの受講者が集まりました。初め学生は緊張していたのか大人しくメモをとっていたのですが、時間が経つにつれて野末さんの話にどんどん引き込まれ、いつの間にか会場は盛り上がっていました。「服を脱ぐと矯正下着で作られた体なんてのが出てきてさ～」、「女性は服を着ないと女として認められないんだぜ～」･･･。時折ちりばめられたちょっと危険な口上は、なぜか女子学生に大受けで、本当に楽しい講演でした。そんな和やかな雰囲気の中、野末さんのプロデザイン講座は終了の時間を知らせるチャイムを迎えてしまいました。　（リポート　中島　良弘）